



ありし日の尾崎文雄博士  
(ご令室 豊子様ご提供)

#### 故尾崎文雄先生の略歴

- 大正5年6月4日生  
学位 医学博士 (大阪大学)
- 昭和17年9月 岡山医科大学 (現岡山大学医学部) 卒業  
昭和17年10月 医師免許取得  
以後、終戦まで陸軍軍医 (大尉) として軍役に服務、復員後は医師として病院勤務
- 昭和25年3月 大阪大学研究生 (微生物病研究所寄生虫学・原虫学部門)  
猪木正三助教授 (当時) の指導のもとに *Trypanosoma gambiense* の免疫学的変異の研究に従事
- 昭和31年1月～12月 米国ノースカロライナ州デューク大学で生理学研究に従事
- 昭和35年3月 医学博士 (大阪大学)
- 昭和36年6月 岡山大学助教授 (医学部寄生虫学講座)
- 昭和41年8月 徳島大学教授 (医学部寄生虫学講座)  
主として *Trichomonas foetus* 等を用いて病原性原虫感染の防御免疫の研究を実施
- 昭和45年4月 第17回日本寄生虫学会学会賞 (小泉賞) 受賞  
研究課題: トリコモナス症の感染防御免疫に関する研究 (岡好万博士と共同受賞)
- 昭和46年11月 第5回日本原生動物学会大会長 (徳島市)
- 昭和57年1月 高知医科大学副学長
- 昭和59年4月 徳島大学名誉教授
- 昭和62年4月 高知医科大学名誉教授
- 平成4年12月 日本原生動物学会名誉会員
- 平成17年4月8日 逝去 (享年88歳)  
(付記: 叙勲等はすべて辞退された)

## 故尾崎文雄先生のご功績顕彰

尾崎先生は父君が陸軍軍医であられた関係からか、厳格かつ真面目な家庭環境の中で育ちになったようにうかがわれた。先生ご自身はたいへん真面目な努力家で、研究は勿論日常の細事においても決して気を抜くことは無く、真剣に取り組まれていた。人に対しても不真面目な取り組みには厳しくたしなめられておられたようである。しかし、そうした几帳面さ生真面目さの反面、私どもとの会話の中では、ウィットに飛んだジョークを連発するなど、笑いの中心になられることが少なくなかった。面倒見が良く、私ども若輩にとっては頼りがいのある兄貴分のような存在であった。どんなにお忙しくても、決して弱音を吐かれることなく、温厚な中にも、どこか凛とした気風をもっておられた。私どもにとって、尾崎先生を失ったことは大変残念なことで、太い梁が落ちたかのような寂しさを感じざるをえない。

尾崎先生の原虫学研究は昭和 25 年、微生物研究所において、猪木正三先生とともに感染マウス体内における *Trypanosoma gambiense* の抗原変異に関する研究に始まったと言える。マウス血流中に出現した原虫は、人血清による治療後、いったん血流中より消失するが、数日後には再び出現して活発に分裂する。この再発株の抗原型が元の感染株の抗原型とは明らかに異なることが示された。尾崎先生はこの抗原変異について詳細な研究を進められ、変異株抗原型 (R 抗原型) が 24 種類もあること、また、変異株感染マウスにおける抗原変異では、元の原虫株抗原型 (O 抗原型) に復帰することなどを証明され、 $O \rightarrow R1, 2, 3, \dots \rightarrow O$  の変異パターンを提唱された。また、この抗原変異を *in vitro* において顕微鏡下で観察できることを確認された。これら一連の研究は、原虫感染における原虫の細胞質遺伝の解明に役立つものとして高く評価された。

昭和 41 年、徳島大学教授にご就任後は、研究目標を原虫感染症では、生ワクチンによる感染防御が重要であるとの観点から、防御抗原物質の特定に集約された。主として、*Trichomonas foetus* による実験的腹腔内感染マウスを用い、当原虫の遠心分画物質中、とくにマイクロソーム分画中に強い感染防御物質が含まれていることを報告された。以後、さらに検索を進め、強い防御効果をもつ物質が原虫細胞表層部に存在するフコースを含む糖タンパク質であることを確認された。この一連の優れた研究成果に対し、昭和 45 年、日本寄生虫学会賞 (小泉賞) が授与された。

その他、徳島大学在任中には、*Trypanosoma* 種原虫を用いた感染防御抗原の研究やキネトプラスト DNA と核 DNA との細胞光学的比較研究、また、*Toxoplasma* 原虫を用いた原虫溶解性抗原 (Obioactin) に関する帯広畜産大学の鈴木直義教授との共同研究など広範囲の研究を遂行され、多くの新知見を発表され、原虫学研究の発展に貢献された。また、獣医学上重要な犬ピロプラズマ原虫の研究や抗トリコモナス剤の治療効果についての研究など医学上の重要な研究をも実施されている。徳島大学ご退官後も同大学および高知医科大学の名誉教授として、また本学会名誉会員として、学会に出席され若手研究者を鼓舞されるとともに学会の発展、運営に寄与された。

尾崎先生と日本原生動物学会との関わりは、猪木先生らと学会設立に遡る。昭和 43 年の設立以来平成 3 年まで幹事 (現評議員) を勤められ、特に学会誌の編集委員として学会誌の表紙デザインを創作されたとうかがっている。昭和 46 年には第 5 回大会長を勤められ、平成 4 年 12 月に名誉会員へ推薦され、その後も長年にわたり学会の発展、研究の進展に努められた。また、尾崎先生は本学会のほか、日本寄生虫学会、日本熱帯医学会、日独原虫病協会、日本臨床寄生虫学会のそれぞれ名誉会員として各学会の発展に貢献された。

平成 18 年 1 月 中林敏夫

(本文の作成に当っては、徳島大学旧尾崎研究室の伊藤義博、林弘三両先生のご協力を得ました。付記してお礼を申し上げます)